

令和4年度 第1回 長野市立博物館協議会 議事録

日 時 令和5年2月10日（金）午後2時00分～午後3時30分

場 所 長野市立博物館 2階 会議室

出席委員 相澤委員・大串委員・東福寺委員・松澤委員・宮下会長・山貝委員

1 開会

2 あいさつ

3 協議事項（議長 宮下会長）

（1）令和4年度事業報告及び令和5年度事業計画（陶山主査）

（宮下会長）「専門家会議の委員は何名か。」

（陶山主査）「6～8名を予定している。」

（宮下会長）「（資料の再評価・整理にあたり）寄贈されたものを返すこともあると思うが、世代が代わって返せないものもあると思う。学校での活用は考えているか。」

（陶山主査）「学校に限らず地元で活用を考えている。」

（宮下会長）「いいものを持っている。個性のあるものもあり、大変だと思う。」

（陶山主査）「地域にある方がいいものもあるので、それは大切に活用を考えたい。」

（宮下会長）「長野県立歴史館でもプレハブを建てるなどしたが、これは全国的問題である。将来的にはここ（収蔵施設）にあるものを取り出してテーマを設定し、展示もできるのではないか。今まで埋もれていたものを掘り起こして、一般にも出して再評価していく。（収蔵庫に）入れた後、評価されていないものに光をあてるのは大切なので展示などを企画してほしい。」

（宮下会長）「信州新町化石館のアンモナイトの企画展示では何が出るのか。」

（畠山係長）「昨年寄贈された北海道のアンモナイトを整理しているので、それを中心に展示する。それだけでなく、県内のものも出す予定である。赤石山脈などでは北海道とは違うものが出るので、展示する。」

（相澤委員）「地元の更北（地区）としてもわかりやすく、地元で使えるものがあればいいと思う。埃をかぶっているものをどう使えるか知りたい。初心者でもわかるようなものならば使いたいという要望が、地元でもある。連携をしたい。博物館の企画展で使って廃棄する予定だったもの、これは資料ではなく造作物であるが、これを公園で使っている。よいのでこれからも使いたい。4月2日～16日は、川中島古戦場史跡公園で三太刀まつりを行う。土日には親子連れがたくさん来るように今年はしたい。市を開く予定である。そういった時に博物館に来てもらえるようにPRしたい。春の企画展示は4月下旬からなので、4月の

上旬にどのように PR するか相談したい。」

(大串委員)「収集方針の見直しやリニューアル方針を策定する中で、収蔵スペースの問題などがあるとは思いますが、どこかで近代以降を充実させる構想が欲しい。今の子どもは戦後も知らないで、テレビ番組のようにおもしろおかしくではなく、博物館で、社会教育施設として意識的に組み立てる必要がある。長野市には公文書館があるので、博物館として独自に意味を持つ収集の仕方を考える必要がある。モノ、8mmフィルム、写真、アルバムなどをどう考えるか。市民が作ったもの、かかわったもので、公文書館は収蔵しないようなもの、これはゴミにも見えてしまうので、意識的に集めなければならない。例えば、新潟ではチラシを収集している。普段の生活のものを意識的に集め、モノそのものを重視することを議論する機会が欲しい。」

(宮下会長)「今の子どもは長野オリンピックを知らない。平成の大合併で地域が大きく変わったが、どうまとめ、伝えるか。記憶の記録化は大切であり、今やらなければならない。消えていくという危機感を持つ必要がある。」

(相澤委員)「昭和 30 年代を境に生活が変わってきている。私も食の変化を追って写真を集めるなどしたが、今 80 歳くらいの人がいなくなるとわからなくなることが多いと思う。そこを地元と連携できればと思う。是非昭和 30 年代に変わった生活について形にできることがあればと思う。」

(大串委員)「昭和 30 年代の変化はその通りだと思う。もう一つ、被災資料を見ていると、1990 年代～2000 年代にがらっと風景が変わっている。中央資本が入り、長野オリンピックや新幹線・高速道路の開通で変わったと思う。そういう企画もできるのではないか。戦後、昭和 30 年代、オリンピックと新幹線。現代は一辺倒ではなく、これらの節目を意識して欲しい。」

(2) 報告事項

(ア) 文化財レスキューについて (陶山主査)

(大串委員)「長沼での活動について、市民によるレスキューに注目してもらっているのは意義がある。研究者としては救出した資料で見えてくることを活用して、市民のみなさんとどういう歴史像をつくるか課題だと思う。偶然だが、長沼地震の資料が出てきて、戦争と長野市について考えることができた。救出から活用までワンサイクルで考えられればよい。」

(宮下会長)「救出したものの再評価が必要。」

(イ) 長野市文化財保存活用地域計画について (文化財課 細井係長)

(山貝委員)「長野市文化財保存活用地域計画(以下、計画)は、最後、認定された後には、何が起きるのか。」

(細井係長)「国の補助にあたり、補助率のかさ上げが見込まれる。文化庁や観光庁の補助に応募する際の要件となることがある。国の補助メニューを使うための要件

になることは、実際のメリットである。だが、それ以上に、長野市にはこれまで文化財の計画があまりなかったため、マスタープランとして作ることに意味がある。今後の事業や、市民の方との接点としての方向付けができる。」

(山貝委員)「これまで、他の市町村では作っているのか。」

(細井係長)「長野県内だと松本市、千曲市、上田市が作成済みであり、長野県はまだであるが、作成中である。」

(宮下会長)「(博物館における資料の再評価にかかわる) 専門家会議と計画が同時進行となっているが、兼ね合いはどうなっているか。」

(細井係長)「計画の事務局が文化財課と博物館になっているため、専門家会議も両課で相談して進んでいくのではないかと思う。」

(宮下会長)「計画には『文化財を適切に維持管理する』『文化財を適切に修理する』とあるが、(博物館の再編にあたっては) 施設の廃止も検討されているとある。ちぐはぐになってはいないか。」

(細井係長)「廃止は、全て廃止ありきではないと認識している。専門家会議においては、死蔵されていたものが再評価されて光があてられる面がある。計画でも『資料の再評価』という措置があり、祖語はしていない。資料が大破するなどして資料の価値が失われているものが(収蔵) 場所を占めてしまっている場合などもあり、そうしたものを再評価で見直すこともあると思う。」

(宮下会長)「計画は未指定のものを評価するものであり、文化財の範囲が広がっている。市としての人的体制などはどうなるのか。」

(細井係長)「計画では、市民との連携も書く。この計画は、行政だけでなく市民総がかりで文化財を守る計画なので、つながり、協力して文化財を守る体制を作りたい。」

(大串委員)「計画が作られるのは、基本的にはよいことだが、どんなテーマを設定し、地域で大切にするか。これが固定的に捉えられてしまい、ここに書かれていないから大切ではない、廃棄という方向に利用されてはいけない。近現代的なテーマとして戦争、善光寺の祈りと平和といったテーマは設定できると思うが、松代大本営はどうするか、といった問題は出てしまう。ゆるやかなテーマにして欲しい。」

(宮下会長)「ストーリーからもれてしまうものをどうするかが大切だ。日本遺産などはそうだったが、ストーリー性がばかりが重視され、それからもれてしまうのはどうするのかという問題がある。PRの補助金は出るがそれっきりとなっては困る。補助金はどうなるのか。」

(細井係長)「大きい補助金はない。ストーリーを作ること注力してしまう。認定後、どのようにして展開されるのかは心配である。」

(大串委員)「フレキシブルに、柔軟性を担保するのが大切である。見直しも必要だ。」

(細井係長)「この計画はゆるやかなものであり、変更も認められている。他の例を見ても、

途中で市民から挙げられたものを取り入れている。大枠の計画として認識できればと思う。」

(松澤委員)「難しいが大変だなと思う。」

(東福寺委員)「博物館も計画に大きくかかわっているのか。宮下会長や大串委員も言っていたが、もれてしまうものがないか私も心配だ。」

(3) その他

・長野市立博物館条例改正について (成田補佐)

(宮下会長)「単純に(条例の文章上の)数字が変わるということでよいか。」

(成田補佐)「よい。」

・全体について

(相澤委員)「博学連携推進のことについて聞きたい。小学校から我々(相澤委員がかかわっている食育推進団体)に話が来るのは、箱膳での食事や藁苞を使った体験がしたいということである。小学校3年生の昔の暮らしにかかわる単元との関連で体験を行っている。以前信州新町で行ったところ、子どもたちは感動していた。地元でも学校の要望に合わせて行っており、地元にも体験の材料がある。子どもが元気に学ぶことを望んでいる。80歳のおばあさんに話をしてもらっているが、食は昭和30年代までかわっていないように思うので、博物館の博学連携には地元でも協力したい。貸出資料の素材については、相談して具体化していきたい。」

(大串委員)「インターネット、バーチャルに情報公開することが求められており、それは大切だが、博物館だからできることをしてほしい。ユーチューバーと張り合っても意味はない。モノがあり、さわれる、人とかがわれるということが大切だ。モノの使い方をその場で学ぶことに立ち戻り、見直すことも大切である。市民協働という理念を実際に実現していくことになる。」

(宮下会長)「本物と出会うことは、博物館のベースであり、記憶の記録化は大切である。モノの意味を伝えていって欲しい。」

(松澤委員)「実際のモノは大切だと思う。私は普段は子育てをしているため、(協議会の内容は)聞きなれない言葉が多かったが、子どもに伝えられるようにしたい。実際に見るのは大切で、その空気感を肌で感じる大切だ。協議会の会場に来る前に、展示されている善光寺にかかわる瓦を見て、調べたら色々なことが分かった。モノをちょっと見ただけでも感動したので、子どもだけでなく大人にも足を運んでいただけるようにPRに力を入れて欲しい。」

(相澤委員)「博物館ではホームページ、ツイッターなどに画像をのせていただいているので、知識は入ってくる。実際のモノに対する興味が出ると思う。デジタルと本物がつながるように、リアル感が伝わるように工夫して欲しい。トキメキ感を

演出するとアクセス数が増えると思う。デジタルとリアルのバランスをとって知識を知恵に変えられるようにして欲しい。」

(宮下会長)「モノと人をつなげるのが学芸員の使命で大切である。今年がよい年になればよい。」

4 閉会